
仮面ライダーヴァイス

hide

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーヴァイス

【Nコード】

N4250Z

【作者名】

hide

【あらすじ】

烈怒と咲希。仲が悪い二人が飛ばされたのは戦国時代。神無怒になれと言われた烈怒は仮面ライダーヴァイスとなって戦う。

神無怒

1話 機械の鳥

神田咲希かんださきは学校祭の準備を一人でしていた。隣の席で赤城烈怒あかぎれつどが寝ている。やることはまだたくさんある。しかし、こんな奴に頼りたくはない。お互い信用し合っていないのだ。簡単に言うつと、嫌いなのである。

しかし、全然作業がはかどらない。仕方なく烈怒に頼るしかなかった。烈怒の背中をゆすった。しかし、烈怒は起きない。烈怒は起きていたが、わざと起きなかった。咲希なんかのために手伝いたくないのだ。咲希は彼の背中を思い切り叩いた。それでも烈怒は起きない。逆にジーンと痛みが伝わってきた。

やりたくなかったが、耳元に顔を近づけ息を吹きかけた。烈怒は恐ろしさの余り跳ね起きた。

「なんだよ。普通に起こせよ」

「だってあんた起きないんだもん」

「よく気づいたな」

「むかつく」

咲希は頬を膨らます。烈怒はそれを呆れたように見つめる。

「それより・・・」

やはりあまり好きでない人に物事を頼むのは難しい。ちらっと、彼の顔を見る。やっぱりかっこいい。昔、彼の事が好きだったことを思い出す。ゆつくり、白い画用紙を渡した。

「ポスター書けばいいの？」

「うん、きれいに書いてよ」

「言うつと思った」

それから、烈怒がポスターを書いている間沈黙が続いた。書き終わり、咲希の肩を指で叩いた。史朗画用紙には、意外なほどきれいな絵や文字が描かれていた。少し見なおした。しかし、まだ信用で

きない。

「結構うまいね」

「もう帰っていい?」

「ダメダメ、まだ書いてもらっよ」

「何枚だよ」

「3枚くらい」

それから、烈怒はポスターを一枚一枚デザインは違ったが、それも恐ろしく丁寧で男子とは思えないほどきれいだった。咲希の顔を見る。やはりかわいい。自分の好みのタイプだった。今まで、数えるほどしか喋っていいない。今日で100日ぶりに会話をしただらう。100日前の会話は会話と言えないほど短く、お互い無駄な時間を過ごしたとしか思ってた。でも、今思えば、結構いい人なんだなと思う。

「もう帰っていいだろ?」

「ポスター貼ってきてよ」

しばらく沈黙が続く。早く帰りたい烈怒にとって、この時間とはともめんどくさかった。机に向かっていた彼女に背後から抱きつく。

「ちょっと、何」

「いいじゃん別。お前、いい匂いだな」

「え、うん。・・・恥ずかしいからやめてよ」

「二人きりだからいいだろ。Hしてくれたらいいよ」

何言ってるんだこいつ。もしかして、彼も自分の事が好きなのだろうか。だとしたら、やってもいいかな。いや、それはだめだ。自分たちは付き合ってもないから。

「何言ってるの。早く言ってきてよ」

咲希は烈怒を突き放す。少し、傷ついた。交渉は失敗に終わった。烈怒は教室を出て行った。変な奴がいなくなっただけだった。しかし、一人というのも寂しいものだ。肩をもんで、また作業に戻る。

その時だった。窓ガラスが割れた。ものすごい音に振り向く咲希。

割れた窓ガラスの前に立っていたのは、鳥の姿をした人型の怪人だった。天狗のような格好をしている。手が震える。咲希は席を立ち逃げようとした。いきなり、なぜこんな怪物が現れるのだ。膝が震え動かない。こんなときに、烈怒がなぜいない。いつも、無視していたのに。なんでこんなときにいないのだ。

「赤城・・・」

思わず、彼の名前を呟く。口がもう動かない。

烈怒は烏天狗が現れたことも知らず、ぼんやりと廊下を歩いていった。ポスターも貼り終わり手ぶらだった。今度こそ教室に戻って咲希を犯そうと思っていた時だった。

咲希の悲鳴が聞こえる。咲希とは断定できなかったが、とりあえず2階へと走り出した。好奇心が働く。適当に自分の教室に向かった。

勢いよくドアを開ける。

「神田！」

叫んだときには視界に烏天狗が映っていた。

「なんだよあれ」

「わかんないよ」

咲希はいつの間にか烈怒の制服の袖を掴んでいた。頼みの綱は彼しかない。袖を掴んでいることも忘れ、目を閉じていた。ここで死ぬのか、全てがもうわからない。どうすればいいんだ。

「最後に一言ずつ言っておこう」烈怒が提案した。

「えっ、こんなときに。あたしさ、今日誕生日なんだ」

「最悪の誕生日だな」

余計な御世話だ。今日は烈怒の誕生日でもあった。

「俺は、お前が・・・す、き」

その時。割れた窓ガラスの向こうから光が現れ、その中から機械の鳥が出現した。また、変なものが現れた。なんて、ついてないんだ。そう思っていると、予想外の出来事が。機械の鳥は嘴で烏天狗を攻撃した。

「えっ」

ほんと予想外だったため、驚きの声が出る。機械の鳥は烈怒のほうへ飛んでくる。そして、足の爪に挟んでいた携帯のような物を烈怒に投げ渡す。

「なんだこれ」

そして、機械の鳥は烈怒の腰に巻きつき、ベルトとなった。烈怒には違和感しかわかなかった。しかし、その時だ。烈怒は何者かに心乗っ取られる。その証拠に烈怒の目が青色に変わり、髪の毛が黒から金髪へと変わっていく。

「赤城？」

咲希が思わず呟いた。黒髪の時よりかっこいい。そう思った。だが、今はそんなことを言っている場合ではない。頼みの綱が今おかしいのだ。

しかしそうでもなかった。その本能に乗っ取られたまま烈怒は機械の鳥が授けた携帯の上画面を横に開き、ボタンを押しタッチ画面を触る。そして、下部の歯車を回してベルトにセットした。

「変身」

いつもの烈怒の声ではなかった。そんな烈怒が咲希は心配だった。唾を飲み込み、そっと見守った。

<アムドライブ、チェンジアルター>

烈怒を緑の輪が包み、ヴァイスへと変身した。

驚きを隠せない咲希。だが、見守るしかないのだ。怖かった。助けてもらっているのに。泣きそうだった。目がうるんでくる。あれは烈怒なのだろうか。

ヴァイスは烏天狗に何発ものパンチを打ち込み、最後の一撃で相手を吹っ飛ばす。立ち上がった烏天狗は翼を広げ、羽手裏剣を飛ばしてきた。ヴァイスはそれをともに受けてしまう。何発か受けた後、羽手裏剣は床に落ちる。ヴァイスはマルチウェポン・アルターレイバーソードモードで弾かれていた。その刃で烏天狗の胸部に重い一撃を振り下ろした。胸に大ダメージを受けた烏天狗は後退して

いく。千鳥足になり、まともに攻撃なんか出来なさそうだった。

ヴァイスは容赦なくアルターレイバーをプラストモードに変形させ、トリガーを引いた。銃弾が相手の足を打ち抜く。そして、まともに歩けなくなった烏天狗は翼を広げ、宙を舞う。そしてまた鼻手裏剣を飛ばしてくる。しかし、ヴァイスはムーンサルトを繰り返して、全てかわす。ただでさえ、今のが精一杯の攻撃なのにヴァイスは翼を撃ち落とした。

床に烏天狗は落下する。携帯のギアを抜き、右足の脛脛のホルスターにセットする。次に、携帯のタッチ画面を触り、上画面を4回上下させる。

<エクスチャージ、1、2、3、FINAL>

ベルトから出た光が、右足のラインを辿りホルスターに到達する。回し蹴りを放ち、ホルスターから飛び出した巨大な歯車をぶつけ、拘束する。そこに、跳び蹴り<アルtailセイバー>を放った。歯車が烏天狗の体を真つ二つにし、ヴァイスはその背後に着地した。それと同時に、烏天狗は真つ二つになった体の間から湧きだした空間に引き込まれた。爆発音が異空間から聞こえる。

ヴァイスは変身を解き、烈怒に戻る。機械の鳥はまだ彼の周りを飛び回っている。まるで、ペットみたいだ。咲希が近づいて来る。

「ほんとびっくりしたんだけど。あんた急に金髪になっちゃうし。変身しちゃうし」

「それがさ、戦ってる時、なんか乗っ取られた気分だったんだよな。だから、まあ、あれだよ」

説明するのがめんどくさくてこうなってしまった。本当は説明しにくくてこう言ったのだが。

その時だ。機械の鳥は巨大な光の渦を出現させ、その中に飛び立っていった。そこから吹き荒れる風に吸い込まれそうになる二人。先ほどの急な出来事に何が何だか分からなくなっていた。嫌いだけど、咲希だけは守らなければ。

「神田」

「赤・・・城」

そして彼らはその光に吸い込まれていった。

2話 神無怒

烈怒はいつの間にか咲希を抱きかかえ、異空間をさまよっていた。ここはどこだろうか。わからないまま、吹き荒れる風に体を任せて、降下していった。光が見えた。出口だろうか。

その光から烈怒の腰が出てくる。刃物の競り合う音が聞える。烈怒は咲希を抱きかかえたまま、尻もちをついた。着地したのは人がたくさんいる場所だった。みんな鎧を着ている。たいまつがいくつかある。もしかして、ここは。

「御屋形様」

「もしかして、お主」

その声に振り向く烈怒。社会の教科書で見たことがある。誰だっけ。

「お主。神無怒^{カムド}か」

「はあ、カムド？」

その時、前衛から馬にのった大男がやってくる。刀を持ち、馬から飛び降りてこちらに走ってくる。刀を烈怒に振り下ろした。やむおえない。

「来いよ」機械の鳥が飛んでくる。「変身」

<アムドライブ、チェンジアルター>

烈怒はヴァイスに変身する。咲希を地面に寝かせ、アルターレイバーで男の刀を受け止める。

「貴様、神無怒か」

「だから、カムドってなんだよ」

そのまま押し切った。男は衝撃で地面にたたきつけられる。

「神無怒だ。神無怒だ」

周りの鎧を着た兵たちが喜んでいる。ここはどこだ。なぜ自分は歓迎される。考えたまま、男に近づく。

「そうでなければ面白くない。行くぞ」

その男は赤鬼に変化した。刀も棍棒に変わる。

「模無怒だ、模無怒だ」
モナド

「落ち着け、神無怒に任せるのじゃ」

先ほどの烏天狗と同種なのだろうか。とりあえず、戦おう。とりあえず咲希を守ろう。アルターレイバーで赤鬼に立ち向かう。しかし、無念にも棍棒を振りまわし、ヴァイスは吹っ飛ばされた。

「くっ。もう、なにがなんだか」

携帯のギアをアルターレイバーのグリップ部にセットし、歯車を回した。＜エクスチャージ＞アルターレイバーの刃の部分が光によって大きくなる。巨大な刃＜アルタイルヘルファイア＞で赤鬼をなぎ払う。

赤鬼は断末魔の声を上げる。しかし、胸部に大きな致命傷を負ったが、体力がまだ残っていたため、人間体に戻り、馬に乗って逃げ出した。変身を解き、ひとまずため息。咲希がようやく目を覚ます。「・・・。うわっ」周りを見て驚き、烈怒に跳びつく。「ここどこ？」

「わかんねえよ」

すると、いかにも大将のような男が立ち上がった。

「お主、神無怒だな」

「だから、カムドってなんだよ」

「カムドって何？」咲希が横から口をはさむ。

「お前ちよつと黙ってる」

咲希の頭をポンと叩いた。「ケチ」と横から聞こえる。呟きが咲希らしい。男が何か言うのを待つ。

「我は信長。織田上総介信長」

「嘘だろ」

もしかして、歴史が変わっているのか。いや。そんな筈はない。パラレルワールド？なわけない。いや、タイムスリップしてるからあり得るか。

「お主のような黒い光から現れ、黒以外の髪を持つものを神無怒と

いう」

何も言えなかった。自分は神無怒。何をすればいいんだ。状況が分からない。咲希は怒られたから口を

とがらせ怒っている。信長の言ったことが耳に入っていないのだろうか。彼女を見つめていても何も怒る気がしないので。と言っても、返す言葉がないので何もできない。

「俺はどうすればいいんだ」

「わが軍の。神無怒になつてくれ。頼む」

そう言つと、信長は頭を下げた。大將が頭を下げたことが相当珍しいのか、周りの兵士たちは驚いていた。自分の立場は気まづかった。考える暇なんてない。この世界でどう生きていけばいいかわからない。この人に頼るしかないのだろう。答えはもう出た。

「わかったよ。俺、神無怒になる。神無怒になつて、お前たちを助ける」

その瞬間、周りは歓喜の声を上げた。すると、一人の忍びが信長の前に膝をついて現れた。瞬間移動の術でも使ったのだろうか。本当に忍術はあったのか。

「伝令です。上杉軍は兵を引き揚げました。追撃をしますか？」

「いや、いい。神無怒が現れた。歓迎をせねば」

3話 模無怒

その夜、烈怒と咲希は信長に部屋を用意された。ふすまが開いた咲希には広大な和の空間だった。畳しかないが、十分に広かったため不満はなかった。

布団を敷いて、ろうそくに火をつけようとした。

「もう寝るの？」

咲希が言つた。さつき怒つてからそう言えばずっと口を閉ざしてたつけ。存在すら忘れてたかもしれない。神無怒や模無怒の話に夢中で気にしていなかったな。

「ダメ？眠くねえの」

「いや、なんとなくだけど」

「じゃあいいだろ」

その言葉と同時に烈怒は布団にぶっ倒れる。咲希は烈怒に寄り添って目を閉じた。

そして夜が明けた。疲れはとれているようだ。胸に違和感がする。眼を開けると目の前には咲希がいた。眼鏡を取っている。あまりかわいくなかった。見なかったことにしよう。言ったら彼女も怒りそうだ。雨戸を開け、外の景色を眺める。日差しが差し込む日向は温かかった。すると咲希が目覚めます。

「何やってるの」

いつの間にか眼鏡をかけている。よほど顔を見られたくないのだろう。まあ、顔は先ほど見てしまったが。

「Hしようぜ」

「また。やらないから。馬鹿じゃないの」

「いいじゃん。ちょっと我慢するだけでいいから」

「あたしじゃなくてもいいでしょ。っていつかなんであたしなの」

「お前が、俺の好みだから」

ゆっくり言った。ほんとは言葉に詰まっていた。しばらく沈黙が続く。ごめんと謝ろうとした時、

「あのさ、あの時なんて言おうとしたの」

「あの時って」

「ほら、あんたが初めて変身した時」

まさか好きだとは言えない。先ほど告白に近いことを言っただけで静かになったのだから。どうやってごまかそうか迷う。顔が赤くなる。俺は神田が嫌いだ、嫌い、嫌い。自分に言い聞かせる。どっちなんだろう。自分は彼女が好きなのか、嫌いなのか。いつの間にか烈怒の顔は赤くなっていた。

ちらつと顔を上げると、咲希の顔がドーン。とある。

「何」

「早くいいなよ」

「・・・そろそろ眠いな」

「何言ってるの。今起きたばっかなのに」

「ははは」

「馬鹿じゃない」

その時、ふすまが開く。忍者がいた。使いか。

「上杉軍が攻めてきました。神無怒殿。出陣をお願いします」

「ああ、わかった」

城下に降りた時だ。上杉軍と言うことは上杉兼信だろうか。とりあえず戦えばいいんだ。そう考えているうちに信長のもとにたどり着く。

「おお、来たか。上杉の模無怒は頼むぞ」

「模無怒だけでいいのか。・・・それより、未来ではこんなことはないって言われてる」

「そうかそうか、お前はほんとおもしろいな」

「なんでそんなのんきにいられるんだ。もっと織田信長って、ホトトギス殺せとか言ったからもっと怖い人かと思ってた」

「わしはそんなことを言うのか」

すると大量の兵士たちが近づいてきた。その中には赤鬼もいる。機械の鳥が飛んでくる。

「変身」

烈怒はヴァイスに変身した。その時、赤いバイクくマシンペガサスが現れる。ヴァイスはタッチパネルを操作した。すると、前輪が90度回転し、後輪は二つに分かれ、45度を開いた。エンジンをかけ、軍の中に突っ込んでいく。

アルターレイバーを構える。馬に乗った赤鬼が見える。棍棒を振りまわしている。そして、すれ違いざまに武器同士が音を立て、ぶつかりあった。お互いウィリーをかまし、もう一度ぶつかりあった。「ふっ、またあったな。今度はこの前のようにかん」

赤鬼から黒いオーラがあふれ、棍棒が金棒に変化する。見た目も

少し不気味になった。なんだかやばそうだ。

<エクスチャージ>アルターレイバーから光の刃が伸びる。滑空しながら<アルタイルヘルファイア>を放つ。しかし、その光の刃は金棒の一撃に一発で打ち砕かれる。

「嘘だろ」

アルターレイバー本体は折れてなかったが、驚きを隠せなかった。技が効かない。どうすればいいのだ。まずあの金棒をどうにかせねば。

4話 援護

「やはりあ奴の特効薬は効くな」

「あいつって誰だ」

「模無怒の力をくれるものだ。そう言えば、貴様の変身前の素顔に似ておるな。まあどうでもいい。行くぞ」

「くっ、マジきついで」

再度ペガサスのエンジンをかけ、前進する。相手の馬の目の前でターン。後輪は刃物になっていて、それが馬を切り裂いた。相手の鞍が断末魔の悲鳴を上げた。その衝撃で死亡するとともに、赤鬼を地面に落とす。

その時、

「今じゃ」

信長の声と共に、銅鑼の音が鳴る。その音を聞いて、兵士たちが弓を放つ。その弓が赤鬼の体に何本も突き刺さる。意外と卑怯だな。しかし、これも戦だ。容赦なく生き、戦わなければならない。

<エクスチャージ>ヴァイスはアルターレイバーをブラストモードにして、<アルタイルヘブンブリザード>を放った。青白い極太のレーザーが赤鬼の金棒を消し去った。

「くそ」

赤鬼は立ち上がると、右腕で怒り狂ってヴァイスの胸部に強烈なストリートを叩きこむ。ヴァイスはその衝撃で吹っ飛ぶ。思い切った殴ったせいか息切れの傾向が見える赤鬼。隙だらけの処をまた弓が

襲う。赤鬼はもう力つきそうだった。チャンスは無駄にしない。容赦なく、容赦なく。叩きのめす。

＜エクスチャージ＞ヴァイスは＜アルタイルセイバー＞を放った。巨大な歯車が赤鬼を切り裂いていく。

「食らえよ」

思いきり歯車にキックを決める。

背後に瞬間移動すると同時に赤鬼は異空間の狭間に吸い込まれる。自分たちは勝ったのだ。

信長は言った。「礼を言うぞ。お主のおかげで勝利することが出来た」

「いやいや、そんなことないよ。俺も一応助けてもらったんだし」両手を振ってアピールする。烈怒はそんなくさい行動がするのもしれるのも嫌いだった。だから他人から礼を言われたりすると、気分的に気まずくなる。

信長曰く、天下に一步近づいた、と言われた。そう言えば織田信長は明智光秀に本能寺の変で殺されちゃうんだっけ。今何年だろう。しかし、助けたらどうなるだろう。パラレルワールドだから大丈夫かな。歴史を変えてもいいのだろうか。というより、もう既に歴史は変わっている気もするが。

二人目の神無怒

5話 イチゴのパンツ（1582）

今は元号がいつで年が何年なのだろう。信長に聞いてみよう。咲希はまだ寝ているので安心した。出来れば彼女には戦いに巻き込またくないのに関わってほしくない。まあ、簡単には死んでほしくないのだ。

自分は戦うことしかできないのだろうか。自分はこの時代から抜け出したいのか。もう良く分からない。自分のことなのに。誰か、誰か教えてくれ。俺はどうすればいいんだ。

その時、初めて変身した時と同じ感覚に見舞われる。この感覚は今度は自分でもわかった。誰かに確実に乗っ取られているということが。

「いずれお前の前に二人目の神無怒が現れる。神無怒はお前のような未来人などではない。本来は強きものである」

我に返る。周りに誰もいないから良かったが今のは一体。二人目の神無怒。まあ、気にすることはないか。信長のもとへ向かった。

ふすまを開ける。信長は酒を飲んでいた。

「おお、神無怒か。どうした」

横に誰かいた。大たい予想がつく。

「突然だけど、今何年だ」

「今は、……。猿」

「はい、今年は天正10年でございます」羽柴秀吉が言った。

「だそうだ。それがどうした」

「いや」烈怒はしばらく考える。

天正10年か。1582年だったら結構ヤバイけど。

「明智、光秀って知ってるだろ」

「家臣におるがどうかしたか」

「……。いや、何でもない」

これは言った方がいいのだろうか。何でもないと行ってしまったからもう仕方ないのだが。そそくさに部屋を立ち去る。

「神無怒はあんなに変わったお方なのですか、信長様」

「まあな。未来人だから、何でも知っておるのじゃ。わしらの運命を」

秀吉はあつけにとられた。

1582年5月。

「敵は本能寺にあり！」

光秀は雑兵に本来とは違う命令を下し、方向転換させたと同時に本能寺へと逆戻りした。

烈怒は信長に秀吉と毛利軍の制圧に迎えと言われた。もちろん何度も拒否した。死なせないために。光秀は今頃どうしているのか。

「秀吉殿」

「なんだ神無怒殿。この前から様子が変だが」

「信長は、間違いなく。死ぬ」

「な、何を言っておるのだ。あの信長さまが、どうやって」

「明智光秀が、・・・謀反するかと」

「なんじゃと」

しかし、今は戦の真つ最中だ。もし本当に信長が光秀に襲われているなら。

「神無怒殿。その言葉、信じていいのじゃな」

「ああ」

烈怒の言った通り本能寺は今、燃えている。豪華の中に信長は少し驚いていた。これも運命か。光秀は、織田軍の雑兵を切り倒しながら信長のいる大広間へ向かっている。光秀の髪が金色に少しずつ変化してきた。夜の色に染まって、金髪は良く見えなかったため、手が空いている者もそれはわからなかった。

烈怒は急いだ。ペガサスジェットモードを走らせ、本能寺へ向か

っている。間に合うだろうか。異次元のマシンの速度は伊達ではなかった。烈怒の予想もしない速度で道を走っていた。秀吉にはここは任せて信長を頼むと言われた。チャンスは無駄にはしない。ペガサスは驚異的な速さで本能寺上空にたどり着いた。金色の髪？

気になったのでその男に向かって急降下する。その時、機械の鳥が飛んでくる。「変身」

烈怒はヴァイスに変身する。光秀は変身音に振り向いた。ヴァイスはペガサスから飛び降り、アルターレイバーを構えて、刃を光秀に向かって振り下ろす。光秀は見事に刀を抜いて受け止めたが、神無怒の刃には勝てず、折れる。

「何？」

光秀は後ろに引き下がる。

「お前が明智光秀か」

「神無怒殿ですか。いいでしょう。・・・私自身気付いておりました。私にも羅異座ロイゾが右腕に現れたことくらい」

「ライザーってなんだよ」

「あなたで言うとその四角い赤の箱ですかね」

おそらくこの携帯の事を言っているのだろう。これは羅異座と言うのか。鷲の羅異座だから、アルターライザー。それがいい。って、そんなこと言ってる場合じゃない。

目の前に神無怒がいるのだ。二人目の神無怒。

光秀の右腕に装着された籠手。ベガラライザーが光ると、三つの弦がはられた四角い小さな機械の琴が出現する。機械の琴はベガラライザーに合体する。

「変身」<アムドライブ、チェンジベガ>

光秀は緑の輪に包まれ、ベルガに変身する。

6話 ベルガ

機械の琴がスライドする。爪になったのだ。しかも結構長い。その時、茂みの中から咲希が現れる。

「あつ、赤城。何でいるの」

せき込んでいる。煙を吸ったのだろうか。心配だ。

「お前、生きてたんだ」

「勝手に殺さないでよ」

すると、ベルガは鉄爪を振りかざす。咲希を抱え、回避する。

「あぶねえな。卑怯だぞ」

「ふつ、くだらない。容赦はしませんよ」

「くっそ。神田、逃げろ」

それしか方法は考えられない。

「でも、周りに兵士がいっぱいいて。あたしなんかじゃ、すぐ死んじゃう」

半分わかっているの答えだった。舌打ちがしたい気持ちにしかない。おそらくベルガは咲希を狙ってくるだろう。彼女だけは守らねば、彼女だけは。

対抗するため、アルターレイバーを振り下ろす。しかし、相手も武器を持っている。鉄爪で剣を受け止め、弾き返し腹に横蹴りを決めた。ヴァイスは吹っ飛んでいく。咲希が駆け寄る。

「ちよつと、大丈夫」

「こんくらい平気だって」

<エクスチャージ>

もうやけくそに<アルタイルセイバー>を放った。すると、ベルガもグリップ部に入っているギアを抜き、琴の側面に差し込む。<エクスチャージ>爪を模した巨大なエネルギーがヴァイスを狙う。

光の爪はヴァイスの巨大な歯車を破壊し、ヴァイスに大ダメージを与えた。ヴァイスは衝撃で変身が溶け、地面に落ちる。

声もあげられなかった。咲希がまた駆け寄る。

「赤城、赤城」

声をかけているうちにベルガは本能寺の大広間へと向かった。烈怒は目を開けなかった。

烈怒が目を開けたのはその翌日だった。

「やっと、目を覚ました」

咲希の表情は自分のせいでこうなったという顔をしていた。咲希のせいじゃない。自分が弱かったからだ。信長をとめれなかったからだ。

信長が生前に言っていたセリフを思い出す。「それが運命なら、我は逆らえん」のんきな奴だ。偉大な人物にこんなこと言うのもなんだが。

ふすまが開く。秀吉が入ってくる。

「神無怒殿。大丈夫でござるか」

「ああ、それより」

握りこぶしを床にたたきつける。

「もう、気にせんでええ。未来ではそうなる運命なのじゃろ。わしも戦で死ぬのじゃろ」

「いや、違う。秀吉はこの後、天下統一を成し遂げ、病死で死ぬ」

「・・・そうなのか」

「ええ」

咲希が横から烈怒の代わりに答えた。秀吉の言葉が気まづくなった。自分は病死か。信長とは違う。

「神無怒殿。わしらも追いつけんかったのが悪い。お互いさまじゃ」

慰めても烈怒の悔しさは晴れなかった。咲希はそれを見ているしかなかった。何か自分に出来ることは。光秀を倒す方法は。現代の

戦国のゲームを思い出す。確か・・・

「わかった。光秀は今度、山崎に現れる。そこで秀吉と戦うんだ。

そして、秀吉が勝つんだ」

「くわしいね」咲希が言った。

「わしが、勝つのか。山崎とは京都の山崎か」

「そう」

烈怒の悔しさはようやく晴れた。今度こそ仇を取ろう。俺は、織田軍の神無怒になるって決めたんだ。約束したんだ。

秀吉は烈怒に笑みを送り、肩をぽんと叩くと、部屋を出ていった。

7話 かたき討ち

天正10年6月。時は来た。ヴァイスは山を走っていた。ペガサスではきついほどの坂だったので走る方が楽だと。

そこに、大量の妖怪雑兵髑髏兵が出現する。ありえなくもないか。アルターレイバーを取り出す。槍をもった兵に対して銃で挑む。銃弾を打ちまくりながら、人込みならぬ妖怪込みを突破する。相手の後ろに

回り込んで、＜エクスチャージ＞トリガーを離し、＜アルタイルヘブンブリザード＞を放った。防御力も弱いせいかすぐに全滅した。

このくらいもう朝飯前のレベルに上がっていたヴァイス。頂上には光秀がいるのだらう。しかし、今のような敵が多数出ることは間違いない。それも覚悟の上で一人で来ていた。

次の敵は黒河童だった。

「今度はお前か、すぐに成仏させてやるぜ」

黒河童はうめき声をあげ、近づいてきた。長い爪を構えてそれを振り上げてくる。それはまるでレベルの低いベルガと似ていた。アルターレイバーで爪を受け止めた。

「お前と戦っている暇はないんだよ」

「では、お前の相手などしている暇もない」

「くだらないな。光秀なんかに、天下は任せられない」

ヴァイスはわざと競り合いを避け、相手の腹に刃を叩きつけた。黒河童は吹っ飛んでいく。すると、黒河童は反撃に口から溶解液を吐き出す。ヴァイスは機敏に反応し、さっと避けたが肩にかすれ、溶解液のせいで肩のアーマーが少し解けた。

「やっべえ。なんだよ、あぶねえな」

ヴァイスはもう決めるしかないと思った。＜エクスチャージ＞アルターレイバーから光の刃が伸びる。横に刃を振り、＜アルタイルヘルファイア＞を放った。

しかし、黒河童はまたも溶解液を口から放ち、光の刃を溶かした。
「嘘だろ、ありえねえ」

「なめるなよ」

黒河童はまたも溶解液を放った。それをまともに受けてしまう。大ダメージを受けるヴァイス。変身は解けなかったが胸部のアーマーが少しただれていた。

「くっ、何か方法は」その時だ。

崖の上から巨大な岩石の岩なだれが起きる。それも黒河童に集中砲火。黒河童はその下敷きになった。顔しか見えてない。今だ。＜アルタイルセイバー＞を放ち、岩石ごと打ち砕いた。

心の中で、倒せたことを喜ぶ。今思えば、雨がひどいな。土砂崩れが起きるのもありえなくはない。

ヴァイスは仕方なくマシンペガサスと呼び、山の外側から頂上を目指した。でかい松の木が見える。平地があるのだろう。もうすぐ頂上なのだろう。待っててくれ、信長。今、仇をとる。

「光秀ー！」

光秀はその声に驚いた。

「もう来たのですか。待ってましたよ」

8話 鷲座VS琴座

ヴァイスの視界には光秀が映っている。金色の髪がなびく。「変身」

光秀の姿がベルガに変わる。それを見て、光秀の言葉を思い出す。
「容赦はしませんよ」

自分も容赦なく生きていかなければ行かないことを思い出す。マシンペガサスで急降下。アルターレイバーを振りまわし、ベルガに襲いかかった。

ペガサスから飛び降り、跳び蹴りを放つ。ベルガは避けると反撃を開始。鉄爪を何度も繰り出してくる。避けるのが精いっぱいになってきた。

「そんなもんですか。期待はずれですね」

「なんだと。お前こそ信長の家臣だったくせに」

「あのお方では、天下は腐り果ててしまう」

「お前の天下はもつと嫌だけどな」

剣と爪が競り合う中良く会話できたものだ。ヴァイスは隙を見て、腹に横蹴りを決める。ベルガは予想通りひるみ、そこに剣を叩きつけていく。

「さすがですね。私の言ったこと、まだ覚えてたんですか」

「まあな。お前なんかに負けてられないんだよ」

ベルガは鉄爪の右ストレートを繰り出してくる。それをとっさに避けて、右肘でエルボーを決める。そして、右足で何発も蹴った後、顔をアッパーカットで吹っ飛ばす。

ベルガの心はしくじったしかなかった。ここで決めなければ、自分分は死に、軍の士気が下がり戦には負ける。＜エクスチャージ＞ベルガは急いで＜カオスストライク＞を放とうとした。それが裏目に出る。＜エクスチャージ＞光がたまった右足でヴァイスはベルガの右手を蹴り飛ばす。回し蹴りを放って、巨大な歯車でベルガを拘束する。

「止めだ」

＜アルタイルセイバー＞がベルガを破壊していく。

光秀は変身が解ける。受けたダメージが大きかったのか、光秀はそこで死んでしまった。

秀吉は信長の後継者になった。烈怒はそれで良かったと思っている。

今から、秀吉にも咲希にも予想外のこと起きる。

「神無怒殿。これから我らに貢献してくれんかの」

「ちよつと、わがまま言っていいいか？」

「なんじゃ」

「俺さ、旅したいんだ」

「はあ、ちょっとあんた何言ってるの」

咲希が思っていた以上に馬鹿げたことを言った烈怒に対して、怒りの表情を見せる。

「・・・そうか、なら、わしは止めん」

「ありがとう」

「ちよつとちよつと。何言ってるの。これから、ここで過してけばいいじゃん」

「なら、一人でいれば」

「・・・ケチ」

咲希が口をとんがらせる。久しぶりに見たかも。この顔。

それを馬鹿にするように秀吉と烈怒が笑う。怒ったのか、咲希は烈怒を両手で殴りまくる。

「もう、なんなの」

少しかわいかった。これが彼女なんだよな。まだ殴ってる。全然痛くないから構わないけど。

翌日、秀吉のもとを離れ、歩き出していた。

「なんで。頭おかしいんじゃない」

「せつかく来たんだぜ。ゆっくり楽しもう」

「やってらんない」

ため息をつくしかない咲希をまた笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4250z/>

仮面ライダーヴァイス

2011年12月19日20時00分発行